

またも、列車内放火・殺人未遂事件発生

続く「模倣犯」、鉄道の安全を考える

10月31日20時ごろ、京王線調布～布田間走行中の特急列車内で男が刃物を振り回し、持っていたライターオイルを撒き放火し17人が重軽傷を負う事件が発生した。

逮捕された犯人は「8月に起きた小田急線の事件を参考にした。ライターオイルを大勢の乗客に掛けて火をつけて殺そうと思った。」と供述している。

国土交通省は2日、異常が発生して緊急停車した駅でホームドアと電車のドアがずれた場合、両方のドアを開けて避難誘導することを基本とするようJRを含む各鉄道会社に指示を行った。また、車内の非常通報装置の使用について、危険が差し迫っている場合は乗客との通話は困難だと指摘。複数の装置が押された場合などは、通話なしでも緊急事態と認識して周辺の他の電車の停止を行うことも指示した。

水戸支社内で運用されている車両には「車内非常ボタン」や「トイレ非常ブザー」「車内防犯カメラ」などが設置されていますが、今回の事件のように緊急性を要する事件などに対し対応しきれない現状があります。

今回の事件では、ホームドアが設置された駅において「旅客転落」を防止するためにドアの開扉を行わなかったという報道もありますが、結果として旅客が窓から脱出する姿が取り上げられ、問題化しています。この問題だけに切り縮めてしまうと非常時の脱出が前提となってしまう、併発事故防止、その他安全対策が蔑ろになってしまう可能性もあります。今回の事件のように「模倣」を行う犯人がいる以上、さらなる安全対策は必要不可欠です。

現在JRでは中・長編成ワンマン運転を目指し、ホームドア設置を行っています。効率化の名のもとに安全対策の“要”である乗務員・駅員を減らし、今では運転士にそのしわ寄せが来ているのです。中編成ワンマン運転では、乗降時の旅客負傷など平常時においても問題が山積している中、このような非常事態における対策には万全な状態とは決して言えません！さらに、社内では注意喚起の放送を行うことのみ周知されている状況です。また、ワンマン列車においては放送をすることは困難であり、これ以上の対策を求めなければいけません。

労働組合としても安全対策を検討し、労使協議を行っていきます！

「究極の安全」を掲げるならば効率化よりも早急な安全対策を！